

# 大陸（南支）

## 歩兵第八十四連隊

### 湘桂作戦 明号作戦

宮城県 千葉 孝 夫

私の家は専業農家です。家族は祖父母・父母・姉二人・弟二人・妹と十人家族でした。ほかに年傭いとして一人おりました。経営面積は水田三町八反歩、畑四反歩を耕していました。

昭和十七年六月、徴兵検査があり、私たちの村からは六十人くらい。

私は昭和十七年徴集である。入営の通知がきて、「昭和十七年十二月二十日、午前十時までに東部第二十二

部隊に入営すべし」とある。私は地域ごと（登米郡）に指定された旅館に宿泊し、翌日午前九時ごろに入隊し、営庭に集合。各中隊ごとに分けられ兵舎に入りました。いずれもが珍しく、軍刀を下げた将校、下士官、古年次兵がいる。兵舎に入ると古年次兵から各人に軍服、編上靴、巻脚絆、兵器が支給され、格好は一人前の兵隊らしくなりました。星が一つの二等兵の新兵誕生である。

各班に入った最初の夜、不安を感じながら点呼のときがきました。見たことがない曹長の人が週番士官に「異状なし」と報告。その後曹長が「中支派遣第二十二師団第八十四連隊よりお前たちを引率する〇〇曹長だ。今後は班付佐々木上等兵の指導を受ける、よいな」と言い残して班内より去って行きました。

班付佐々木上等兵は、声高に「お前らは階段を上がつて班内に入ったが、階段が何段あったか分かる者は手を上げる」だれも手を上げる人がいない。私は広い階段を珍しく数えたので手を上げた。佐々木上等兵は私の胸の名前を見て「千葉、何段だ」「はい、十二段です」「ようし、いいか、今から戦地に行くお前らは何事にも注意が必要だ。なおさら戦場では細心の注意を怠ってはいけない、わかつたな、休め」と言つて班内より出て行きました。

翌日からは、敬礼、銃の操作、被服の手入れなどの教育、午後からは予防接種。以後、毎日、毎日の訓練である。

明けて一月一日、早朝起床とともに初年兵は徒手、帯剣で、服装を整え、駆け足で営庭に整列。「歩調とれ」の号令で営門を出ました。師団司令部のある青葉山の展望台で元朝詣りである。もちろん武運長久である。「皆こつちを見る、仙台も見納めだ、よく見ておけ」引率者の下士官の言葉に何か寂しさを感じました。昭和十八年一月五日、早朝（午前三時ころ）営庭に

軍装で整列、約八百人の新兵の出陣です。仙台駅までの二十人町はひっそりし、軍靴の音だけが物々しく響く。時折窓から手を振っている人もいます。仙台駅に到着、ホームで各中隊ごとに乗車する客車の横に整列が終わり乗車を始めるころ、東の空がうつつら明るくなりはじめた。ホームの外では大勢の見送りの人垣ができていました。

汽車がゆつくり動き出す。二度と帰つてこられるだろうか、胸の中がジンと熱くなる。青葉山での「仙台も見納めだよく見ておけ」の言葉、写真・遺髪・爪などを考えていました。

下関で乗船、釜山上陸。また汽車に乗り一路中支那の部隊へ、山海関・徐州・濟南・南京を経て杭州で無蓋貨車に乗り替え、目指す部隊の駐屯する浙江省の金華に夕方到着しました。下車後、金華江の川原で軍旗に敬礼、連隊長の訓辞、暗くて連隊長の顔すらはつきり見えない。部隊長に対し「頭中ッ」<sup>かし。</sup>川原に各隊の号令が響く。ここから各中隊の警備地に四散し、私たちが第七中隊石骨山の麓の中隊に着いたのは夜半ころ

のようでした。疲れているので「早く休め」とのこと。各班ごとの整頓棚の下に名前が張られている所に旅装を解き、おそい夕食を食べながら、班長江幡伍長、班付兵長、上等兵から明日の予定について説明を受け、初めての戦地の兵営の床に就く。軽機班（私は軽機関銃班であった）。

翌朝九時、週番上等兵の声で起床。班長・班付兵長・班付上等兵から、洗面所・入浴場・炊事場の説明を受け、遅い朝食後営庭に整列。中村中隊長の訓辞、教官根本少尉からいろいろ細かい説明、付近の敵情石骨山陣地・安地陣地などの説明があり、前線にしていることの緊張がひしひしと肌で感じました。

日が経つにつれ兵営の生活にも忙しさとともに馴れてきて、毎日実戦を想定しての厳しい訓練が続く。夕食後の学科は毎日のようにピンタ、くどくどと班付の文句、その後はピンタ。ようやく床に就いたころ、週番上等兵が木銃を持って班内を見回る。整頓棚の整頓が悪い、編上靴の手入れが悪い、兵器の手入れが悪い、毎日何人かがピンタの材料になる。二カ月、三カ月こ

ろには「今晚もピンタか」と諦めの状態が毎日続く。一期検閲が近づくと訓練も厳しさに一段と気合が入って、朝から床に就くまで、駆け足の一日でした。

五月下旬に一期検閲、連隊長深野時之助大佐が第七中隊の練兵場に集合した各隊を検閲、各中隊長へ教官を前にして検閲の講評があり、「優秀であった」と教官から聞かされ、明日は洗濯休養にするからと知らされる。山程ある先輩や自分の洗濯で一日中、沢の洗濯場は井戸端会議場さながらの盛況である。夕方物干場から洗濯物を取り込んだとき、戦友から人事係准尉が呼んでいるとの連絡で准尉室に行きましたら、「今すぐ支度をし暗号手教育で連隊本部に出張」を命ぜられ、新しい被服に着替え、申告の要領を教えられ、中隊長、教官、小隊長に申告。大隊本部からの連絡便で教官から「千葉は中隊に帰って来ないだろうから頑張るように」と言われ、トラックで二十キロメートルくらいある連隊本部に到着。各中隊からの仲間たちと一緒に通信隊の二階である教育隊の兵舎に入りました。

朝夕の点呼は連隊本部で受け、明日からは塚原軍曹

が教官で初歩からの特訓。連隊本部の教育は約三カ月。十八名に対しての教育があつたが、連隊本部の教育の終わるころには八名になっていました。

この八名は師団司令部へ行き、各連隊から選抜された計約四十名で毎日、乱数転記、電報組立、電報の解説など、午前中は勉強、午後から体操・野球・散歩などが日課でした。その間各部署で先輩の指導で実務教育等あり、頭の中はヘトヘト、指には豆がでるほどの特訓が続きました。

師団司令部の教育が終わる前日、桑原教官（中尉）から実務教育部署が発表された。私と第八十五連隊の二人（名前を忘れたが）が歩兵団司令部へ、師団司令部・各連隊本部・各大隊本部などにそれぞれ実務教育の勤務を命ぜられました。実際に生の電報の発信受信の勉強をするので、過ちは絶対に許されないのです。

昭和十九年三月ころ、部隊が移動するため呉淞に逐次集結中となつたので、私たち二人は原隊復帰を命ぜられ、部隊到着まで呉淞兵站宿舎で待機しました。三、四日後部隊到着、連隊本部電報班に合流、同日付で歩

兵第八十四連隊第二大隊本部電報班に勤務を命ぜられ、勤務申告をしていよいよ私の本当の勤務の部署が決定しました。

## 【解 説】

第二十二師団は宇都宮師団管区で支那事変勃発後の昭和十三年四月臨時編成され、（歩兵第八十四連隊・宇都宮、八十五・仙台、八十六・羅南）、十四年九月、中支の第十三軍創設とともに隷下に入り、杭州地区に位置していた（補充隊は仙台師団管区となる）。

大東亜戦中、第十七（月）、第十五（祭）師団が、南方、ビルマなどに転用され、十七年に浙贛（せつかん）作戦の主力兵団。

昭和十九年二月一日大陸令第九二七号により第二十三軍（南支軍）隷下となり、直ちに準備に着手するとともに、師団も機動作戦に適するよう訓練に着手した。しかし、転進は船腹の関係や、企図秘匿も兼ね警備交替も長期にわたることとなる。師団の広東付近集結、作戦立案等を実施し、上海付近集結には呉淞の紡績工

場などを当てたが、滞在期間の短縮を図るため、船腹が整い次第輸送を開始する準備をしていた。

第一次輸送は、歩兵第八十四連隊長の指揮する師団司令部、歩兵第八十四連隊（山砲兵第五十二連隊、工兵第二十二連隊等の配属部隊を含む、で四月末、第八六船団とレイテ〇五船団（昭南丸）ほか七隻）と共に第十八、第二十海防艦、「朝顔」「開南丸」などの護衛をもって高雄港着、五月十日十九時発、五月十三日十六時二十分香港入港、部隊は九竜に上陸。鉄道（広九鉄道）輸送により、五月十五日広東着、郊外の中山大學に集結した。

しかし該船団は帰路二十日十七時五十二分、東沙島北でB24四機の爆撃を受け、二機を撃墜したが、「神寿丸」沈没、「厚利号」「筑波丸」被爆、その救助中に米潜水艦の雷撃により砲艦「橋立」と「筑波丸」は撃沈された。しかし、歩兵第八十四連隊及師団司令部、山砲、工兵等は被害を受けずに上陸できた。

第三次、歩兵第八十六連隊と配属部隊、輜重兵二十二隊は雷撃を受け遭難人員の約七〇パーセントは救助

されたが、人員約六百人、馬匹、武器、弾薬、装備品一切は海没した。特に輜重連隊の馬匹損害は大であった。船腹の都合で上海に残った第三大隊は駆逐で直接香港に輸送され、第八十六連隊主力より先に広東に集結した。

師団長平田正判中将は五月十七日上海発空路広東着、第二十三軍隷下に入り、第二十二師団の南支転用は大命発令後約五カ月にして完了した。

「第二十三軍は予定ノ部署ヲ以テ独立混成第二十二旅団ヲ六月二十四日日没後、爾余ノ各兵団ヲ六月二十七日日没第一期攻勢ヲ発起ス」と命令が発せられた。

第二十二師団深野支隊（歩兵第八十四連隊、山砲兵第五十二連隊主力基幹は、六月二十七日朝、増城（広東東北東約五五キロ）北東側から龍門（広東東北東約百キロ）に向かう作戦を開始した。

先遣隊は二十九日朝、蔴榨墟（増城北東二六キロ）に進出して引き続き龍門に向かい前進した。先遣隊が龍華墟（龍門南方一六キロ）に達し、支隊主力も七月一日午前中に同地に進出した。支隊一部は左潭墟を奇

襲、主力は七月三日朝、龍門を攻略掃蕩し、一部をもつて左潭墟を二日攻略、それぞれ三日夕には龍華墟に帰還した。師団は戦闘司令所を増城に進めて戦闘を指導した。

第八十四連隊は八月上旬、陸路江門（新会県）に集結をし、第二期ト号作戦の準備をした。発起時期は中支第十一軍の衡陽攻略後と予定されていた。

部隊の移動は南方方面らしい。私たちは「九江丸」に乗船、船には兵隊はそんなに多くなかったように思われましたが、後で分かったのは「九江丸」には高雄港で台南、台中、高雄の女子高生（看護要員）六百人が乗船し、高雄港に四日くらい停泊、広東に向け出航。その間私たちは対空監視が航行中の勤務でした。

無事広東到着、大隊本部の行李の陸揚げ、中山大學に集結作戦準備中に作戦命令が出ました。

十九年六月二十七日、私たち八十四連隊第二大隊も龍門作戦に参加、初めての作戦参加行軍中交信時間がくると無線が交信。初めて作戦電報、先輩佐藤兵長らが手際よく受信文を大隊本部副官に手渡す。第一回目

の電報受信。大隊本部より各隊の状況の発信、緊張と刻々と動く状況、電報班の責任の重大さを痛感しました。

第二大隊本部は増城北北東二十キロの正果圩に位置し、各隊の現在地作戦の内容等を連隊本部に打電、二、三日後に作戦終了（約二週間）大隊本部は無事増城―中山大學へ帰還しました。中山大學で次期作戦準備完了しました。

八月上旬、陸路江門付近に進出し、湘桂作戦に入りました。九江―高明に進出（九月十日頃）、歩兵第八十四連隊は追撃隊として雲浮―鬱南方面に進出（九月二十五日）。

十月に入ると敵空軍の来襲が激しくなり、連隊の行動が思うどおりに進まない。敵情が細かく入電すると直ちに大隊本部で各中隊に情報説明するなど緊迫した戦況でした。

十一月、八十四連隊は貴州北方地区に進出。遷江に北進中に米空軍の空襲が激しく、昼間待避し、夜間前進という日が続きました。その間、通信連絡が途絶え

ることもあり、第八十四連隊は「樟木墟」に向かつて西進中も敵機の来襲で思うように進まない。

第二大隊が西進中に下盤石付近で敵と遭遇（午後六時ころ）、迫撃砲、重機等で迎撃してきました。夕闇の迫るころ、時折前の田圃の中で敵軍が迫って来る。

三、四軒の民家があり、その中で無線開設し連絡中、異常な状勢を目撃しました。白兵戦で第八十四連隊大工原第二大隊長戦死。負傷者も出る。迫撃砲弾が飛んで来る。そのうちに電報班長より後退を指示され、どのくらい後退したか。遠く後の方で銃声が聞こえる。

大工原大隊長の戦死を連隊本部に打電、遺体を茶毘に付するため、小さな林の中で全員敬礼しながら廃材などに火を付け、遺骨の一部を当番兵が首に奉持し後退しました。暗闇の中の後退である。未だずっと後方で散発的に銃声がある。どのくらい後退したであろうか、前の方で話し声が聞こえる。

第一〇四師団の前線に到着し、その後の指示を受けるために連隊本部に打電。第八十四連隊は思練墟付近に集結、賓陽より南寧に急進、十一月下旬南寧に入城

後、まもなく討伐で初年兵の軽機班で枕を並べていた遠藤頼信君戦死。

第二大隊は南寧に集結、次期作戦準備。南寧付近の警備討伐中に仏印進駐のため、南寧出発し憑祥に向かつて南進した。

### 【解説】

第十一軍の第三師団（幸）、第十三師団（鏡）、第二十三軍の第一〇四師団（鳳）は柳州を攻略、第二十二師団も柳州南方各地を攻略した。第三・第十二師団は引き続いて貴州省へ進撃を、第二十二師団と第三十七師団（冬）は南寧を攻略後、仏印への大陸打通を命ぜられ、湘桂作戦の目的は達せられようとしていた。

また、第二十二師団は独立混成第二十二旅団と共に「十九年十二月十五日零時第十一軍ノ指揮ヲ脱シ第一軍ニ転属ス」の命令を受けた。

その半月前の第二十三軍参謀長の波集参電第五八二号によれば、

一、正部隊（第二十二師団の作戦中の謀謀号）ハ、

十一月三十日果徳ヲ攻略シ、南寧、賓陽附近確保ノ態勢ニ移行中ニシテ各歩兵一個連隊ヲ以テ賓陽、武鳴、南寧附近ニ配置シ其ノ第一線ヲ以テ鄒墟―上林―舊恩府―橋利墟―扶南（南寧南西四十キロ）ノ線ヲ占領ス。

又信集團一宮隊ト連絡ノ為正第三十四部隊（八十四連隊）ノ一大隊ハ十二月五日隆安（南寧北西八〇キロ）附近発、西洋江右岸―金陵墟―蘇墟―綏祿（南寧七〇キロ）ヲ経テ思寨ニ向ヒ前進中ナリ。四集團（第二十三軍）戦闘司令部ハ八日廣東ニ復帰セリ

また、漢口に推進中の支那派遣軍司令部は十一月以降撤去し南京に復帰した。

二十年一月十三日、第二十二師団は南方軍の戦闘序列に入れられ、師団司令部及びその兵力の約半分は二月下旬までに北部仏印に到るよう指示された。

三月十日（陸軍記念日）午前零時、印支国境鎮南関より仏印に入るや、すぐフランス軍との戦闘開始。ドンドン保堡の攻撃中の第一大隊は間もなく保堡を占領。

八十四連隊は北部仏印に向かつて前進シタクトケ、カオバンを攻略。第二大隊はカオバンの北ニューインピンに進出。警備前線であり緊張の毎日だが、ようやく長期の駐留になるらしい。

大隊本部の設営、各中隊の分も設営、前線の陣地から敵情報報告を連隊本部に打電報告などしていると、連絡便のトラックが来た。作戦中は車を見たことがない、連絡便のトラックから食糧、弾薬、下給品などが降ろされ、各隊に配られる。のんびりした警備期間中でした。ただ時々米軍機の偵察程度の飛行を見ましたが。

無線が後の小山（五〇メートル）に開設され、近くの民家に宿営していました。電報班では小山の下の町の一角にある大隊本部より、無線の台地に交信時間ごとに往復しなければならぬ。一日に十回くらいの登り降り繰り返しの連日です。各中隊では昼間は警備し夜間演習等で何カ月の警備だったろうか。

昭和二十年七月下旬、連隊本部より入電の中で、「第二大隊は現在地（ニューインピン）を撤収し連隊本部に集結すべし」を受電。各中隊の命令受領者に伝達。

準備完了次第カオバンに集結、カオバン保塁に入る。連隊本部、第二大隊本部はカオバン保塁に、各隊はフランス軍の兵舎に、各陣地にと警備部署に就く。カオバンの地形は保塁の前に川があり（大きな）、四方は小高い山に囲まれた町でした。住民も三々五々散歩し町の中は賑わっていました。市場も開かれ、戦争中なのかと思うくらいでした。

そのうちに各陣地から小高い山に中国軍の陣地が肉眼でも見えるようになり、異常な状況になってきました。八月中旬後半に終戦を知り、各隊が慌ただしくなってきました。陣地の死守するとか降服するとか、不安な言葉を耳にする。連隊本部の電報班では交信時間が多くなってきました。私らも応援。「部隊は速やかにウオンピに集結すべし」の命令で、進撃した道路を折り返し、ウオンピに集結。自活生活に入りました。

昭和二十一年三月下旬、内地帰還のため海防（ハイフォン）港に集結。四月上旬に「リバティーV〇〇八」に乗船帰国の途につきました。名古屋上陸直前、コレラ患者が発生したため、浦賀に回航されて隔離になりました。

ました。六月になってようやく浦賀に上陸し、復員準備手続をすることができました。六月六日、連隊解散、六月十一日に帰郷することができました。

## 湘桂作戦

### —大溶江口撤収作戦—

福島県 安田 義三

私は福島県の矢吹町で農家の次男として生まれ、そこで成長しました。ご存知のように、その時分の農家の次男、三男は都会に出るか、満蒙義勇団に参加するほか生活の手段はなかったのです。幸い私は県内の開拓地に入植でき、五年目ころからようやく軌道に乗り始めたと思ったところ突然の召集です。

妻と三歳の長女と生後三カ月の長男の四人暮らしでした。

昭和十七年の九月、新潟県の村松部隊です。そこで三カ月の猛訓練を受けましたが、幸いなことに宮城県、